

書評

土屋 健 著

古生物のサイズが実感できる！ リアルサイズ古生物図鑑 古生代編・中生代編

只木 慧
Kei TADAKI

以前にも外苑春秋にて「鉱物見タテ図鑑」(フジイキョウコ著)という「見立て」に関する科学の本を紹介した。今回もそれと同じく、図鑑で見るだけでは興味を持ちにくいものをワクワクする形で提供してくれる本だ。

中学高校と理科の時間、特に生物の時間は好きだった。フワフワした動物や、瞳の可愛い爬虫類、植物の体の仕組み。それらに関する理論は興味深く、細胞や光合成の仕組みには自分の知らなかった世界がこんなにもよくできていたのかと感動した。しかしその中でも、苦手な分野はある。覚えきれないイモリの予定運命図、面倒な計算、実物も写真もできれば遠慮したい昆虫。そして化石や古生物である。

まず、化石の写真は茶色か灰色ばかりでよくわからない。図鑑のカラーのイメージ画像は可愛くない上に不気味で怖かった。ギョロリとした目に触覚付きの、ヒラメのような昆虫のような巨大生き物が海で泳いでいたなんて、想像もしたくない。

だが、それを覆してくれるのが本書である。

本書の前書きにまさにあるように、今まで古生物の図鑑などには全長などの記載はあっても、それを身近に感じる「スケール感」はなかった。そのためただでさえ知らない時代を見たこともない生き物が、「怖い」と感じられてしまうのだ。

しかし、表紙を見て欲しい。駐車場に一匹のディメトロドンがのんびり休んでいたら、たとえ肉食だとの記載を読んだ後でもかわいらしく感じないだろうか。子ども部屋のプロトケラトプスが子どもに寄り添っていたら、のどかで微笑ましく思えるのではないだろうか。そうやってこの本では、今までになかった形で古生物の世界に読者を誘ってくれる。

また本書の素晴らしさは、図鑑としてのイラストの美しさである。写真かと思紛うばかりの美しく精密なイラストは、我々の日常に違和感なく新たな存在を同席させてくれる。図鑑としてだけでなく、壁に飾ってみても楽しめそうなイラストだ。しかもあまりに自然に古生物が描かれているので、しばしばどこにいるのだろうと間違い探しのように楽しむこともできる。

さらにイラストだけではなく語りかけるような文章は、専門的な話も出てくるが、ユーモア

もあり非常に読みやすい。こういう形で提供されれば、古生物の怖さなんて感じない。

そうか、ギョ口目のヒラメはアノマロカリスというのか。巨大だと思っていたが数十cmから最大1m、市場で売られている大きめの鯖程度なら怖くない。いや、それでも当時の動物がほとんど10cm未満と考えれば実に巨大だったのか。さすが「カンブリア紀の覇者」である。そう、素直に感心出来て興味がわく。

そして本書を読み終わってみれば、要は今までの古生物の不気味さや怖さは、身近に感じられない、よくわからないから感じていただけのものである。それを飛び越えればこんなに楽しい世界が広がっている。きっとそれは古生物の世界に限らない。それを教えてくれるのも本書の魅力である。

